日本の素顔

人間というもの 愛ということ

生きることを最後まであきらめない人のそばにいるだけで……

松沢常夫
（日本労協新聞編集長）

満足感いっぱいのお顔でした

二〇〇二年一月五日（土）12：30～14：00、21：15～22：15

食事の量は半分ぐらいに落ちているが、しっかりと食べる。「これから頑張らんと…」と、言う。お互いに人生について話し合う（ヘルパー・男性A）。

六日（日）14：00～17：30

ヘルパーに何度も〝ありがとう〟と言う。苦しい中でも、ヘルパーやボランティアの人への心配りをしている（ヘルパー・女性B）。

七日（月）8：30～10：00、11：00～15：00

本当に「アッ」というまの出来事でした。ご家族にみとられ、苦しみもなく、自宅で最期を終えられたことは、本当によかったと思います。人の最期に出会えたことは、私にとって幸せでありました。死化粧として、ひげをそらせていただき、幸せでした。「お疲れさま、手足を自由に使って伸び伸びとしてください」と祈ります（ヘルパー・女性C）。

これは、運動神経が侵され全身の筋肉が萎縮していく原因不明の難病・筋萎縮性側索硬化症（ＡＬＳ）患者で、一人暮らしのＹさん（男性）が、大阪府枚方市の文化住宅で四十四年の人生を閉じたときの「訪問介護記録」です。週三日、一日一回の家事援助からスタートして約一年半のケアでした。

気管切開をせず、最後まで自分の口で話し、食べて、生きる道を選択したＹさん。最後の半年は酸素吸入をしていても

呼吸が苦しく、不安で、十五分、二十分の睡眠さえ奪われ、一分、二分おきの体位変換なしには耐えられない、という状態でした。

大阪高齢者生活協同組合ケア・ワーカーズコープ「ほっとステーション御殿山」がサポートの中心になりましたが、二〇〇一年九月のケアカンファレンスには循環器センターの主治医をはじめ、市の高齢社会室、障害福祉、保健センターの作業療法士、保健師、在宅医療のケースワーカー、訪問看護師、ケアマネージャー、ヘルパー、ガイドヘルパー、お父さん、ボランティアで入っている友人、そしてYさんと、三十人もの方が参加しました。

「こんな、想像を絶するケアになるとは思ってもみない未熟な私たちだったから引き受けることができたと思う。Yさんは不安でしょうがないはずなのに、穏やかに、自然に命がスーッと消えていった。もだえ苦しむこともなく、この病気とたたかいつくしたぞっていう満足感いっぱいのお顔でした。私たちも、こころの支え合いがどれほど大きいものか学びましたし、こんなケアが出来て、〝死〟ってこわくないなと、すごく教えてもらいました」

Yさんを担当したケアマネージャーで、「ほっとステーション御殿山」の所長・谷口律子さん（五十三歳）はこう語りますが、死にゆく人から、命の大事さを放射され、かえって元気をもらう。そんな仕事、働き方、人間の絆がなぜつくれたのだろうか。

一生おつきあいしましょうね

谷口さんと訪問介護主任の薄井今日子さんがYさん宅を初めて訪問したのは二〇〇〇年七月二十一日。お互いに緊張していましたが、Yさんは、洗い晒しで透き通るほどペラペラの、伸びきったTシャツ姿で二人を迎えました。すでに上肢の筋肉に支障が現れ、腕を上げることも伸ばすことも難しくなってきたYさんにとって一番着脱しやすい素材に仕上がっていたのがそのシャツだと気付いたのは、しばらく後のことでした。

YさんがALSを発病したのは、北海道で中学の教員をしていたとき。結婚し子どももいましたが、離婚して一人暮らしでした。母親は認知症が進み、その介護をする父親も疾患をかかえ、日中から酒を飲まないと精神のバランスがとれない状況。何も出来なくても、近くにいれば父親の精神的な支えにはなれるだろうと、生まれ育った大阪府枚方市に戻ってきました。

谷口さんは「長いおつきあいになると思いますが、一生おつきあいしましょうね」と約束しました。同じ〝人〟としての「おつきあい」を「一生」と。

Yさんも、「ヘルパーさんが何人も替わるのはいや。三人までに」と注文を出した以外は「自分のことはなんとか自分で」と頑張り、ヘルパーが訪問すると、すでに洗濯をすませ、どうにか手が上がるフェンスに干してありました。調理

も好きで、まな板を大腿の付近まで下げ、腕を上げないでもよい状態での包丁さばきはなかなかのものでした。

一つ、また一つと、できることが奪われていく。その中でも、ユーモアと優しさを欠かさない人だったと、薄井さんはこんなエピソードを紹介してくれました。

「ショウガのチューブが囚われの身になっている」と、深刻そうな訴え。何のことかと思ったら、冷蔵庫の奥に氷の塊ができ、チューブが取れなくなっていたのでした。

保育園の息子をつれていったときは、「かわいいなあ、かわいいなあ」と頭をなでてくれ、タンポポがきれいだったので、摘んでコップにさすと、「いいね、いいね」と喜び、「今、悩んでること、ないの？」と、逆に気遣ってもくれました。「それで、プライベートなこともポロポロ言っちゃう。お互いに素になって話ができる人でした」。

若いヘルパーが入ったときは、なんとも心がなごむひととき が生まれました。

デイサービスの責任者をつとめていた二十代の男性が泊まり込みのケアにつきあったときは、いびきざんまい。〝いい音楽やなあ〟と、苦笑していたそうです。

当時十九歳、ヘルパーになりたての女性は、肉じゃがを頼まれ、下ごしらえしたあと、Yさんに聞きました。

「仕上げはケチャップ味にしますか、チーズ味、しょうゆ味、それともカレー風にしますか」

吹き出したYさん。にっこりウインクして、「そうだね、今日はシンプルに、しょうゆ味にしてもらおうか」。

行き過ぎだというのなら、一人の人として

しかし、体調の悪化は急速でした。

当事者同士の連携が大きな支えになると考えた谷口さんたちは、九月にALS患者会に誘いました。Yさんはメール等を用いた情報交換を提案するなど、水を得た魚のように張り切ったのですが、帰りには誰に言うともなく、「毎月行くのは無理かもしれないなあ」と口にし、思っていた以上に自分の体力低下を感じた様子でした。

翌二〇〇一年三月には、両下肢・体幹部の運動障害が著明となり、トイレまでゆっくりゆっくり行くのですが、バランスを崩して転倒すると、自分では起きあがることができません。七月には居室での立ち上がりも難しくなりました。誰もいないときは、電話の子機に何とか足を伸ばし、親指で短縮番号を押し、父親かヘルパーに来てもらうようにしていました。

九月には呼吸困難となり、夜間は酸素導入。食事、排泄、入浴で全介助が必要になり、とうとうオムツも。

Yさんの場合、とくに求められたのは体位変換でした。「ベッドを一センチ上げて」「五センチ上げて」「二センチ下げて」というのはもちろん、「タオルを一枚敷いてほしい。四つ折りだと高すぎる、二つ折りにして」「頭上げて」「肩上げて」「耳がかゆい」「左の足、右に五ミリ動かして」「手の

ひらを上に向けて」……それが一分、二分おきに夜中もずっと続きます。「一ミリ」「五ミリ」という一言を発するのもつらいなかで。これは本人にとって、どういう状態なのか。

「ぼくの体は紐でぐるぐる巻きにされたうえに、重い石臼のようなものが載ってる。その石臼が右足に載ってるのを左足に変えたら少しは楽になったような気がする。だけど、場所が移るだけ。石臼は載ったまま」

谷口さんが尋ねたときの答でした。

ヘルパーも三人では無理になってきました。「五人までいい？」「八人は？」と相談。最後は「何人でもいいよ」と言ってくれました。入った人が交代までの一時間、二時間をボランティアでつなぐ、というかたちを基本に、本格的な二十四時間ケアが始まりました。

谷口さんは普段でも夜中の十二時頃に帰宅していましたが、風呂に入ってから、お化粧をしなおし、〝ぶわーっ〟とYさんのところに車を走らせる日が多くなりました。家でそわそわしていると、夫も高校生になっていた二人の息子も「いいよいいよ、行きいや。気いつけて帰っておいでや」と送り出してくれました。三時頃家に帰ってきてもすぐには眠れません。四時か四時半頃に寝ると、すぐ朝です。

「家族のお弁当はもうつくらなくてよかったから、ギリギリ八時半の朝礼に間に合うように、あと五分、あと五分と。七時頃起きて……」

こんな谷口さんに、思いもかけない批判がスタッフの中から投げかけられたことがあります。「Yさん一人にそんなに気持ち入れて、どうなの」と。「かなりショックで、一晩寝ずに考えた」と谷口さんはいいます。

命はすぐそこまでと限られている病気。普通なら、不安で不安で、イライラし、周りの者に当たる。しかしYさんは、日に日に襲ってくる病気と真っ向から勝負している。その彼の一日一日と変わる状態をつかみ、支えるシフトを組むには、自分で入るしかないではないか……。

あの人に手厚くして、この人に冷たく、ということならば偏っている。必要でない人にたくさんのサービスをするのはおせっかいだ。しかし、これがないと生きられないという人に、必要なサービス、必要な愛情を、というのは、共に生きること、支え合うことではないか。目の前にいる人の尊厳を守ることができなくて、人の命を支える仕事なんかできっこない……。

「炎天下で喉が乾いて乾いてしょうがないのに水に手が届かない。そんな人の口に水を入れてあげることがそんなに悪いことなの！　Yさんへの関わりが行き過ぎだというなら、私はもうケアマネでもなんでもなく、一人の人として関わりたい」

翌日の朝礼で決然として言うと、もう異論は出ませんでした。

ほんな、家で死ななあかんでー

仲間とのたたかいは、磨きあいでした。谷口さんが「お願

い！」の声を発すれば、みんな何とかしようと真剣に応えてくれます。
「間隔を三十分しか空けられなくなったの。どうしよう。不安がってるのよ。不安で不安で、もう不安が襲いかかってくるのよ」――状況を伝えさえすれば、担当のヘルパーたちが頑張ってシフトを調整しなおします。
「手が動かなくなった、助けて」「メール打てなくなったから、次の方法考えて」「椅子から立ち上がるのが苦しくなったから、改造して」――こんな電話をかけるたびに、保健センターのIさんは、夜中でもやってきてくれました。トイレに設置した電動簡易昇降機を使いやすくするために、出っ張りを切り落とそうとしたときは、固くて電動のこぎりも電動ドリルも歯が立たず、五時間もかかりました。その集中力に感嘆したYさん、ようやく切り落とされた部品に〝集中力〟と命名し、目の前のテレビの上に飾りました。
在宅ホスピスで著名な南吉一医師という力強い味方もできました。
Yさんは「ほとんどの機能を奪われたうえ、自分のことを表現できずにジッと我慢。そんな状態は死よりも怖い」と、気管切開を拒否し、「家で命を閉じたい」という思いを持っていましたが、「最後はやはり病院で」とも話していました。
家でなら一分二分ごとに体を動かしてもらっているのに、病院だとどうか。一人でいる時間がこわい。自分ではベルも押せないし……。でも、家で悶え苦しんで死んでいったら、ヘルパーに責任を感じさせてしまう。それはできない、という思いだったのです。
しかし、今の病院では最低限のことしかできない、ということがわかったとき、谷口さんは叫びました。
「ほんな、家で死ななあかんで！　家で死のうよ！」
〝生きることも、死んでゆくところも、一緒に歩んでいくよ〟〝どんな状態になろうと、人間らしく生きる権利を全うさせずにおくものか〟という思いでした。
Yさんも、〝そこまで受けとめてくれるのか、迷惑をかけてもいいんやな〟と、吹っ切れたのでしょう。
「うん、ここで死にたい」と本音。
「それやったら、こんな先生がいてはんねん、ぜひその先生に来てもらおうやん。面識はないんやけど、その先生のとこ、行ってもいい？」
承諾を得ると、谷口さんは、その足で南医院へ。
「確か、電話してアポイントとったと思うけど、気が付いたら待合室に座っていました」
診療が終わるのを待って必死に話しました。「あなたは本人でも家族でもない」と、最初は断られましたが、泣きながら食い下がると、「わかりました。あなたのコンダクトの中の一奏者になれたらぼくは幸せだ」とフォローを快諾してくれました。
とって返し、「行ってきたよ。先生、受けてくれはるて」と報告。まさか、すぐ行くとは思っていなかったYさん、

「えっ、もう行ってきたの！」とびっくり。

かすれ声で「それは逆や…」

クリスマスの夜。谷口さんは、白い袋をかついだサンタクロースの人形をプレゼントしました。

「この袋には、来年もこうしてクリスマスを迎えることができるように、たくさんの時間が詰まっているのよ」

「そんなに欲張ったことをサンタさんに頼んではだめだよ」

「じゃあ、ひな祭りまでは一緒にいられるかな」

「そうだね」

こんなシビアな会話が交わされましたが、旅立ちの時はわずか二週間後に訪れました。

アメリカに永住している友人が、わざわざ帰国し、高校時代のクラブ活動で一緒だったメンバー数名と集まり、「わいわいがやがや、ほんとに楽しんではった」正月の三日三晩が過ぎた一月六日の夜。

「行こうか」と谷口さんが連絡すると、「忙しいのに、いいよ」と遠慮した返事があってから五分、「やっぱり来てほしい」。自分から「来てほしい」とはめったに言わないYさんが、「今晩はなんだか不安でしょうがない。律子さんにそばにいてほしい」と、かすかに聞き取れる声でヘルパーに伝えたそうです。

駆けつけて、「何か食べたの？」と聞くと、「不安で何も食べてない」。

「これは愛情いっぱいのジュースだから」と言って、南医師からいただいていたイチゴとバナナのジュースをつくると、それを飲み干し、ロールパンも「食べたい」。

しかし、日付が変わった頃から様子が変に。谷口さんとヘルパーとで「まず看護婦さん、次ぎ南先生」という具合に、いざというときの手順を確認していると、かすれ声でよく聞き取れませんでしたが、Yさんが「それは逆や」。

自分の意思をはっきり示すYさん。その二週間前にもこんなことがありました。眠れないというので、夜遅くでしたが、南医師に来てもらったときのことです。

「安定剤を処方しましょうか。ぼくが飲んでる安定剤だから」と、自身が心筋梗塞もガンもあることを明かしている医師から言われても、Yさんは「本当に大丈夫なんですか、ALSでも」と念を押したのです。南医師が確認すると、「呼吸器には危険が伴う、ということも書かれてある」と返事が寄せられ、「やっぱりやめましょうね」となったのでした。

「それは逆や」と主張しつつ、谷口さんから「ごめんね。声が出るようになったら、もう一回話し合おうね」と抱きすくめられると、「いいよ、いいよ。ぼくの誤解かもわかんないから、気にしないで」と、気を遣ったYさん。これが最後の言葉となりました。

谷口さんは、もうだめかなと思い、ご家族に連絡した後、朝礼に出るため事務所に向かいました。息を引き取る場面に自分がいなければならないとは思わなかったそうです。

やるべきことは存分にやった、自分に求められていることはやりきった、という思いがあったからこそ、あとは静かに家族と担当のヘルパーに送ってもらえればいい、という心境にもなれたのでしょう。

立ち会えたのは、ガンで夫を早くに亡くしたヘルパーで、Yさんにとっては、お母さんのような存在の人でした。

「ああ、お父ちゃんの次に逝っちゃった。お疲れさま。ありがとう」。この気持ちは、冒頭の介護日記となりました。

「律子さん、手が重いですよ」

発病した当初は、〝なぜ自分が！〟と、親戚の方に向かって泣き叫んだこともあったようですが、この病を受容せざるをえない現実に立ち、気管切開をしない道を選択したとき、Yさんはどのような日々を生きようとしたのか。

谷口さんは、「寂しい人生じゃない終わり方をしたい。みんなから愛されたい。愛されなかったら寂しくて死ぬに死ねないと思ったのではないか」と推測します。

「彼は私たちを愛してくれたし、私たちも、この人の一生を守ってあげたいと思った。彼も、守られてる安心と、愛されてる安心で、私たちヘルパーに愛情をそそげた。お互いに、無いもの、できないことを補い合った。それは対等なんです。対等だからこそ不安もなくなったと思う。もし、ケアするだけ、されるだけの関係だったらここまで続かなかったと思う。生きることを最後まであきらめない人のそばにいるだけで、私たちには、すっごい励まし。ちょっとでも眠れるように、彼の気持ちが穏やかになるんだったらと思って、足をさすってあげる。私の方がウトウトッとする。『律子さん、手が重いですよ』とかいわれて、『あっ、寝てた！』って。私はそこで満たされて寝てたんです。人は、手も足も動かなくなっても、愛することはできるんです」

「愛しい愛しいYさま」と、訪問できない日に送ったメール――それはヘルパーを通じてしか届かないのですが――を「これ、もっていってね」と、リボンで括ってすべて棺に入れた谷口さん。しかし、ヘルパーたちみんなも、Yさんと「愛」で結ばれていました。

薄井さんが第二子の出産を経て、しばらくぶりに復帰したとき、「何か足りないものはない？」と聞くと、返ってきた答えは「足りないものは何もない。あふれるほどの愛があるから」でした。

「しんどくて、呼吸もハーハーしてるのに。ポタッて、涙が落ちそうになりましたけど、そんな風に言ってもらえるくらい、みんな頑張ってるんだな、天晴れだなあって思ったんです。そんな仲間が、すごくうれしくて。あの時、Yさんもうれしそうに笑ってて。忘れられません。別のケア先でつらいことがあったヘルパーは、Yさんのところに行くと、みんな励まされて帰ってきた。Yさんとの生活は、凝縮した、かけがえのない時間でした」

残された日々がどれだけ限られていようとも、人生を決し

て投げ出さないYさんの生き方そのもの、存在そのものが、共に生きるエネルギーを生み出す、そんな人間関係をつくりだしていったのでしょう。

普通のおつきあいの回復

Yさんと谷口さんたちとの命の響き合いは、親子ですら殺し、殺される事件が毎日のようにおきている日本社会にあって、どういう質を持つのか。

単刀直入の問いに、「なんでしょうねえ」と考え込んだ末、谷口さんは、〝普通の人間同士のおつきあい〟の回復ではないかと、こう答えてくれました。

「ご飯が食べられないからお口に入れてあげるとか、生きるために足らないものは補っていっただけ。普通に世間話もし、相談もし、一緒にいることで励まされ、満たされることが多かった。このおつきあいは、たまたま介護保険の一部とかだったけど、普通のお友達だから、自分の担当の時間が過ぎても、次の人まで一時間空いてしまうとなったら見捨ててておけない。次の人がくるまでいる。次の人は、五分でも早く行ってあげたいとなる。自然の流れなんです」

たしかに、今の社会では消え去ってしまったかのようにみえますが、〝お願い！〟と頼られたとき、自分にできることならば何とか応えようとするのが人間でしょう。

二十数年前、谷口さんが三十歳を過ぎて出産したときがそうでした。夫は深夜にしか帰宅せず、年子を抱えておろおろしていた谷口さんの〝お願い！〟の言葉に、近所のお母さんたちは、入れ替わり立ち替わりやって来て、子どもたちを風呂に入れ、寝かせつけ、お父さんたちは遊びに連れていってくれました。

〝お願い〟がコミュニティをつくる出発点なら、当然、〝ありがとう〟があります。谷口さんの家では、八人乗りの車を買いました。お世話になっている近所のご夫婦と一緒に二、三日かけて旅行に行くために。南医師らには、咲くときれいなハートを形作るカーネーションの生花を毎年バレンタインデーに届けています。「君のこのお花でまた元気が出たよ」と、うれしい返事も返ってきます。

高齢社会の中で、介護保険制度が生まれ、人が人をケアする仕事が広がり、女性の自覚が高まり、社会参加が強まる。これが、〝普通のおつきあい〟を蘇らせてきた背景にあると思いますが、この仕事を志した女性は、かなりの方が、〝生存競争〟の渦の中に置かれた夫との〝たたかい〟を経なければなりませんでした。谷口さんもそうです。

「あなた！　お願い！　私が死んで、棺を開けてさよならするときに、『奥様はほんっとに世の中に未練がいっぱいあって、仕事がしたい！って、そんなお顔で亡くなってらっしゃいますね』っていわれたいか、それとも、『ほんっとに人生を謳歌されて亡くなられましたね、いいお顔なさってますね』といわれたいか。どっち！」

日本では珍しい「予防歯科」に取り組む歯科衛生士だった

谷口さんが、夫から「自営をしたい、君の力を一年でいいから借りたい」といわれ、手伝いはじめて十年。〝私の人生を生きたい！〟という思いが募って夫に迫ったときの言葉です。〝彼だけに尽くしたのでは、与えられた命に申し訳ない〟と。

Yさんのお通夜には、「君がこれだけ支えた彼。本当はすごく会いたかったけど、ぼくが行くと、見世物みたいだと、彼につらい思いをさせるから、ぼくは君をフォローすることで彼をフォローしてきたつもりだ」と、どしゃぶりの中、夫もお焼香に参列しました。

〝共に生き、支え合う〟協同組合だからこそ

谷口さんは、「ケアとは、お互いにおもいやり、励まされること」と話し、「〝共に生きる〟ことをめざし、仲間と支え合いながらやれる協同組合こそ、もっと力を発揮すべきだ」と強調します。

協同組合でなければこんな関わり方をする人はまずいないだろうと思われるのが、深夜の三時から入っていた稲本悦二さんです。アパレルの卸会社を六十歳で後人に譲り、ヘルパーの門をたたいたばかりだった稲本さんは、谷口さんの大変さをみて、この時間からの仕事を買って出たのです。

その、やさしい心遣い故に、おまわりさんに捕まりそうになったこともありました。

二時半頃にかけるバイクのエンジン。近所の方が気になって、「この頃、ご主人、夜中に出ていかはるみたいやけど、どちらへ？」と奥さんに声をかけました。この話を聞いた稲本さんは、うるさくしてはいけないと思い、百メートルほど先の広い通りに出てからエンジンをかけるようにしました。

「夜中にバイクを押してうろうろしている。そこへパトカーが来ましてね。バイク泥棒と間違えられたんです。それで、『今からこういうお宅へ行くから付いて来い』と言ったんです。そうしたら、付いてこなかったですけどね」

同じ大阪高齢協の事業所「ほっとステーションわたの花」からも、男性ヘルパーが片道二時間の道のりを、夜中の介護に何日も通ってくれました。

そして、「のめり込みすぎ」という批判を乗り超えてきた谷口さんは、「一つ一つのケース、個々のニーズに対応した、制度の範囲以上のもの」をつくりだす中心になれるのが、働く人たちが出資し、経営もし、「人と地域に必要な仕事をおこし、まちづくりを進める」ワーカーズコープ（労働者協同組合）、高齢者生活協同組合ではないかといいます。

Yさんのケースでも、介護保険だけでは二十四時間の介護にはとても対応できず、障害福祉からも給付をと要求し、枚方市役所に毎日のように行きました。「前例がない」という対応に、「前例はどうやってつくるの！　次ぎに私と同じような人がきたとき、また『前例がない』というの！　前例はつくっていかなければだめでしょ」と〝泣いて訴え、笑っておどかし〟、「足りない分はボランティアでこうがんばるか

ら」という提案もして、最低限の費用を出してもらうことができたのでした。

「普通の企業であれば、儲からないからと、トップのところでだめになるだろうし、働いてる人だって、稲本さんのような人は出てこないでしょう。仕事としてケアに入ったあと、次の人がくるまで一時間、二時間ボランティアで、なんてこと、とてもできないでしょうね。それも、お正月の一日から。みんなで地域を支え合う、という気持ちが一致していて、常に常に、みんなで話し合って意思統一がしっかりしてるから、『あなた、こうしてね』という前に、『私、こうするわ』という。働く人同士が協同し、利用者さんとも地域とも協同していく、ほんとに、協同労働というベースがあるからできたんです」

共に生き、暮らし、働く、その人間の響き合いを発見し、つくりだすのが〝協同労働〟だというのです。

生きるのに、制限なんてあるのかな

「ついつい、なんとなくハンドルが向いて」……亡くなってからも、しばらくの間、毎日のように通ったYさんの部屋。狭い文化住宅の、誰もいない真っ暗な部屋の電気をつけると、家族がそのままにしておいてくれた白い箱とお花。

「五分だけよ。今日は忙しいから二センチだけ」とか語りかけ、お線香を短く折って火を付け、「あ、消える消える。じゃ、行って来るね」と、飛び出す谷口さん。いっぱいいただいたジャズのCDも、残業をしているとき、よくかけました。

あれから三年余。今、「御殿山」は気管切開をしたALSの方二人を二十四時間介護しています。かなり進行してからケアに入ったため、舌の先で示される意思がヘルパーにはなかなか読み取れず、苦労の毎日です。

「一生おつきあいしましょうね」と約束して、もう一人、新しいALSの方とのおつきあいも始まりました。不安感から

投稿原稿募集

会員の方は会員、準会員を問わず、どなたでも『民主文学』への投稿ができます。投稿の際には次の事項にご注意ください。

◇ワープロ、パソコンでの原稿の場合は、必ず二十字詰め二十行、もしくは四十行で縦書の印字を厳守してください。

◇原稿は返却いたしませんので必ずコピーをとっておいてください。

◇原稿の採否については三カ月くらいかかります。ご了承ください。

◇二重投稿は堅くおことわりします。

（編集部）

毎晩深酒になる、という話を聞いた谷口さん。「どうせ飲むのなら、一緒に飲みましょう」と、お宅に伺い、身体が不自由な奥さんも含めて三人でしゃべりながら飲みました。六時半くらいから飲みはじめ、気がついたら一時。次はお返しで、事務所近くの焼き鳥屋さんで飲みました。

「利用者さんのお宅で飲んだり食べたりしたらあかんでしょ。それを破って、十二時回っても飲んでるんだから。でも、今のうちにどこまで信頼関係をつくれるか。それが、受身でなく病気とたたかっていける力、最後までどう生きるかのおつきあいができる基礎になると思うの」

工業社会になって、人間関係が分裂させられ、生も死も孤独になってきました。しかし、死を前にして、あらためて人間関係を再生する場面が私たちの前に浮上してきているように思います。おそらく、介護の本質が介護保険制度を超える事実を生み出さざるを得ないでしょうし、もっと元気なうちからの、人間らしい関係性の大切さが問われ、そして、死も特別なことではなく、日常の生の延長としての死、豊かな生がつくりだす穏やかな死となっていくのでしょう。

死と生に真剣に向き合っている人間同士の関係は、柳澤桂子氏が『われわれはなぜ死ぬのか　死の生命科学』（草思社）の中で述べているように、「死は生を支え、生を生み出す」ものとなっていく。そんな気がします。谷口さんも読んでいるという柳澤氏の『生きて死ぬ智慧』（心訳・般若心経）（小学館）にこんな一節があります。

不生不滅
宇宙は一つづきですから
生じたということもなく
なくなるということもありません
乃至無老死
亦無老死尽
こうしてついに　老いもなく　死もなく
老いと死がなくなるということもない心に至るのです
老いと死が実際にあっても
それを恐れることがないのです
羯諦　羯諦
波羅羯諦
波羅僧羯諦
行くものよ　行くものよ
彼岸に行くものよ
さとりよ　幸あれ

谷口さんは、ＡＬＳの方と飲んだ話をするなかで、サラリと、こんなことをつぶやきました。

「生きるのに、制限なんてあるのかな」

普通に生き、普通に死のうよ、お互いにこころを通わせ合いながら、と。